

氏 名	たかぎ あきら 高木 彰
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博甲第 641 号
学位授与の日付	平成 24 年 3 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専 攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学 位 論 文 題 目	都市・建築空間の文学的研究——稻垣足穂と村上春樹から東京と神戸を読みかえる——
審 査 委 員	(主査)教授 伊藤 徹 教授 石田潤一郎 教授 秋富克哉 名古屋大学大学院文学研究科准教授 *日比嘉高

論文内容の要旨

本論文は、日本の近現代における都市および建築を巡る空間経験のあり方を、文学作品の記述分析に基づいて解明しようとした試みである。この試みを支えている基本志向は、都市もしくは建築の空間が単なる物理学的空间に留まらず、多様な意味経験やその蓄積と不可分なものとして経験されおり、この経験を生き生きとした現象に則して捉えようとする方法論的意識であり、そのことが文学作品の分析へとつながっている。本論は、第 1 部では、稻垣足穂（1900– 1977）の戦前の作品「うすい街」（1932）を手がかりとして、イタリア未来派の建築や、日本におけるその受容のあり方、さらに同時代の国家主義的なポリティクスなどと対比するかたちで、都市建築の空間の動性を〈目的なき機械〉として明らかにしている。続く第 2 部では、対象としての稻垣足穂のテクストをより広い範囲に拡大し、この作家が作品の舞台として設定する神戸の空間性を〈多層平面〉として取り出し、これを関東大震災から東京大空襲に至る 2 つのカタストロフに挟まれた同時代の東京の都市計画及び建築造形の原理に対置することによって、足穂の経験に含まれていた後者への批評的要素を析出しようと試みている。最終部となる第 3 部では、デビュー以降の村上春樹（1949– ）の諸作品を全般的に扱いながら、ポストモダン以降の現代における都市空間の特質を取り出そうと試みているが、それは、足穂と同じく東京と神戸とを両端に据えた現代の作家の空間経験をもう一つ別な視座として設定することによって、そこから浮き彫りになった現代都市空間の固定化された開放性に疑問符を投げかけるものとして、第 1 部および第 2 部において〈多層平面〉や〈目的なき機械〉として取り出した足穂のテクストにおける都市・建築の動的空间性の現代的意義を際立たせるものである。本論の展開は、「うすい街」や同じく足穂の作品「有楽町の思想」などのテクストに生じた複数回の改稿を丹念にフォローするなど文献探査も踏まえたものとなっている。また本論は、オットー・フリードリッヒ・ボルノウ、ガストン・バシュラール、クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ、前田愛、鈴木博之などによる、建築・都市空間に関する先行研究を受け継ぐと同時に、それらがもつてている方法論的問題を克服しようとする意図を、その出発点に表明し、さらに足穂や春樹についての従来の研究を批判的に踏まえたものもある。

論文審査の結果の要旨

本論文は、都市・建築の空間に関する経験の具体相を、稻垣足穂ならびに村上春樹の文学的テクストを手掛かりとして、空間経験の反省と記述に関する明確な方法論的な変革の意識に基づき、捉えようとした試みである。

文学的テクストを建築・都市空間の研究にもたらし思想的次元で分析しようという、文学・建築史・思想史に跨る学際的な研究は、皆無とはいわないまでも、まだ十分には、展開されていないものである。外部的な視点を想定しそこから統御的に把握された空間イメージによって覆い隠されている「生きられた空間」の把握と分析とを目指す申請者は、現象学の系譜に属するボルノウやバシュラール、また文学研究の立場から独自な仕方で都市空間にアプローチした前田愛、使用者による意味の蓄積が沈殿した空間のあり方に建築史の立場から着目した鈴木博之などに共通して見られる抽象化された空間図式への批判的志向を受け継ぎながらも、それらがもっている方法論的不徹底性を克服しようと意図をもって、稻垣足穂と村上春樹の文学的テクストから、都市空間の経験の具体相を浮かび上がらせようとしているが、このことは、研究対象の選択の希少性に留まらず、空間研究のあり方全般に対する申請者の姿勢が単に既存の手法の適用に甘んずることなく、新たな方法論の提示を試みようとしているという意味で独自性をもっており、そのことが第一に評価さるべきものといわねばならない。同様の姿勢は、近代文学の既往研究の成果に追随することなく、たとえ代表的な研究者によるものであつたとしても、それらと自らとの解釈的差異を明瞭に示そうとしている点にも現われ、申請者の文化研究者としての資質を伺わせるものである。

第二に従来、マイナーな作家として近代文学研究のなかでも十分扱われていなかった稻垣足穂のテクストのなかから、イタリア未来派の建築思想による影響を探り出し、さらにその影響の変質を当時の芸術論のコンステレーションのなかに位置づけ、足穂の空間思想の独自性を析出したことは、近代文学研究のジャンルにおいても注目に値するし、ファシズムへの傾斜を強めて行ったイタリア未来派に対して足穂のテクスト改稿の後を辿ることによって際立たされたこの作家がもつ差異は、社会思想や政治学などへの学際的な広がりの可能性を含んでいることができる。実際申請論文では、関東大震災後の東京都市復興計画を中心とした建築史的知見と文学的テクストの読解とを独自な仕方で織り合わせることによって、従来見られなかった政治思想的風景を描き出していることは、この可能性が具体化されたものとして、評価されてよい。

第三に申請者が、接続しながらも年代を異にする稻垣足穂・村上春樹という二人の文学者を通して見ている空間現象は、〈目的なき機械〉、〈多層平面〉、あるいは〈開かれた焦点〉と、さまざまな名前で呼ばれているが、申請者自身が問題として抱えている同一の事柄であり、それは建築や都市、あるいは文学といった個々のジャンルを超えた問題、科学技術と人間との関係を問い合わせ直すという課題の一端をなすものであって、こうした問題を根本のところで自覚していることは、申請者の思考のこれから展開への期待を大いに抱かせるものである。

なお申請論文のベースとなったものは、下記 2 点の査読付論文である。

1 高木彬「目的なき機械の射程——稻垣足穂『うすい街』と未来派建築」、全国大学国語国文学会編『文学・語学』第 202 号、2012 年 3 月(予定)、(本論第 1 部第 1 章に相当する)。

2 高木彬「ポストモダン・ローカリティ——村上春樹の「開かれた焦点」とその主題化——」、日本近代文学会(関西支部)編『村上春樹と小説の現在』、和泉書院、2011 年 3 月、2 頁～13 頁(本論第 3 部第

1章に相当する)。